

特集 「病」によせて

金 澤 周 作

現在、テレビやネットをはじめとするメディアを観ると明らかなように、先端医療への期待から、食事や運動など生活習慣指南の流行り廃り、サブリや民間療法の喧伝や、霊験あらたかな神社仏閣での無病息災の祈願に至るまで、あたかも人間の興味関心のほとんどは、「病」（と「健康」）に集まっているがごとき状況である。この小文を校正している時点では、（二〇二〇年一月末）、新型コロナウイルスの問題が大きな不安をかきたてている。これと並行して、自然科学のみならず人文社会科学においても、「病」は大きな研究分野になっている。歴史学、考古学、地理学でも同様である。人類は「病」とともにあったからである。

「病」を探究のテーマにするならば、必然的に、病に罹患したり治癒したりする人間、病そのものをもたらす動物や病原菌（あるいは超自然的要因）と折り合おうと苦闘する社会や国家、特定の病を多く発生させる環境、病を救おうとする医者、病を理解し意味付けようとする知の体系など、さまざまな関連する論点が浮上してくる。本特集を構成する諸論考もまた、こうした問題に取り組み、どれも新鮮な驚きをもたらしてくれる。まさに「病」という共通テーマの深さと広がりを実現している。

さて、オックスフォード大学出版局から刊行されている『医学史・関連諸科学史雑誌』（第七〇巻第四号、二〇一五年）に、「医学教育における歴史学の擁護」と題する共著論文が掲載されている。^①アメリカ合衆国やカナダの医学部教育における医学史の効用を、その実際の担い手たちがあらためて強く主張したものである。「病」の歴史というテーマが、歴史学・考古学・地理学の内側でのみ、つまり純粋に人文科学的な学問のフィールドでのみ興味深いのではなく、医者養成とい

う直接社会に還元される教育の現場においてさえ、きわめてアクチュアルな意義を有していることに気づかされた。

同論文によると、過去二〇〇年の長きにわたり、医学教育の現場では、医学知識や医療実践に関する視野を広げること
に医学史は役立つのだと主張されてきた。いわく、医学史は、傲慢になりがちな医者に、過去の医療従事者たちの試行錯
誤を教えて謙虚な態度を促し、過度に身体還元主義的になりがちな医学の性格をより人間的なものにし、また、医療の社
会性、すなわち、それが社会的、経済的、政治的な文脈に埋め込まれた異なる人間同士の出会いの性格を持つことに、注
意を向けさせてくれる。要するに、医学史は、医者の卵たちに、高い倫理性を備えた職業的な自覚を促す効果があるとい
うのだ。

おそらく、このような目的で日本でも医学史が医学部で講じられてきたと思われる。しかし、教養科目全般の例に漏れ
ず、限られた予算と時間の中でカリキュラムにしっかりと組み込もうとしても、その前には高い壁がそびえ立つ。「この講
義を受けることで身につく能力とはこれこれだ」ということを具体的に言わなければならない昨今においてはなおのこと、
医学部のカリキュラムの中で医学史の必要性を主張する根拠が「職業的な自覚の促進」だけでは、他の専門的な講義科目
と競合すると随分と分が悪い。

しかし、この論文の著者たちは、非常に大胆な主張をする。医学史は、解剖学や生化学や病態生理学などと同等の、根
本的な医学知識の構成要素だというのである。その理由として提示される諸項目は、歴史学的なものの見方の範型のよう
なものであり、私たちが「病」を歴史的に考える際にも、羅針盤の役割を果たしてくれる。少しパラフレーズして列挙し
たい。

まず、個々の「病」は、時代によって、人間に及ぼす影響力も、定義も、治療方法も、社会的な意味も、変化する。医
学史はこうした「病」の変性を医者志す者たちに教えてくれる。また、「病」に対処する医学的知識と医療インフラ
は、地域と時代に固有な社会的、経済的、政治的な過程に強く規定された偶然性と限界を帯びる。そして、「病」への対

処法を体系的に理解するには、医療だけではなく、看護、公衆衛生、ソーシャルワーク、宗教なども考え合わせる必要がある。医学史は、医療を広い文脈の中で考えることを教えてくれる。さらに、人間や社会の健康と不健康は地理的、階級的、ジェンダー的に不均等に分布している。医学史は、これらに注意を促すことで、科学では割り切れない医療の現実を教える。そして、医療にまつわる倫理や規範もまた、以上の諸要素と連動して歴史的に変化する。医学史は過去の事例を伝え、現代の医療従事者にたえざる反省を求める——。したがって、とこの論文は次のように宣言する。「歴史的分析は、分子生物学や薬理学と並んで、病とその効果的な治療に関する我々の理解に根本的な貢献をなす」と。

ここでは主な対象は医学部の学生になっているが、過去の「病」を学問的に追究することとその成果を知ることとは、より広い範囲の人々にとって、たんに知的好奇心を満たす以上の、きわめて大きな、一人ひとりの生き方に迫る意義を有すると言つて良い。

そして、このような医学教育の現場からの声を念頭に置いて読むと、本特集の諸論文はいつそう輝きを増す。本庄論文は、断片的な文字史料を丹念に拾い出し、丁寧な文脈付けをほどこし、九世紀以前の日本で頻発した疫病の惨禍とこれに対処する律令国家の実績と限界を、かの有名なマクニール・モデルを批判的に想起しつつ、端正な文章で鮮やかに描く。

疫病の流行には、このときすでに人災と天災の両側面があったこともうかがわせ、現在の意義も大きいように思われた。法貴論文は、十一世紀から十三世紀半ばに書かれた、貴重なカイロのゲニザ文書に注目し、そこに含まれる眼病治療実践を記した二通の書簡を精緻に読み解く。そして、普遍的知のみを記す当時のイスラーム医学の学問論——エピステモロジー——とは異なる、つまり医学文献の記述のされ方に回収されない非言語的領分の存在を、間接的に、ただし、巧みに指し示してみせる。本庄論文と同様、深い背景知識を持った歴史家が一見些末で無味乾燥に見える史料に触れる時、いかに封じ込められていた過去が解放されるのかを、この論考は例証している。

古病理学の手法を駆使し、現在の京都と青森の地に出土した江戸時代の人骨から往時の男女の健康を論究した藤澤論文

は、人骨という非文字資料に対して自然科学の技術を用い、人文科学の問いを投げかけ、飢饉や低栄養が常態であり、少なからぬ割合で発症する梅毒が蔓延する世界の、過酷な生を浮かび上がらせる。本庄論文にあらわれる古代人と同様、度重なる飢饉を経験しこれを生き延びた近世の人々は、「繰り返される厳しい環境が身体にダメージとして刻まれ、骨や歯にその痕跡が強く残っている」。この古病理学の洞察は、文字資料を扱う歴史研究者にも裨益するところが大きいだろう。

十九世紀のイギリスにおける水道管由来の鉛曝露の問題に取り組む高林論文は、藤澤論文とも通底する自然科学的なまなざしをもって、その健康被害の程度と質を、精神疾患との相関の有無という観点から検証する。二十世紀初頭のある精神病院の患者一八〇〇人あまりの量的分析は、しかし、有意な相関を示さない。実証論文にとつては不都合な事態と思いきや、高林は当時の都市貧困層の劣悪な栄養状態のリスクが、鉛曝露のそれを上回っていたのではと指摘する。一対一の因果関係に注目しがちな現在の通俗的な健康理解（〇〇を食べれば長生きする、のような）がいかに不適切であるか、また、そのような狭隘な視野で病の歴史を理解しようとするのがいかに的外れであるかを、この論文は教えてくれる。

近代を特徴づける「グローバル」な病としてのコレラをどのように認識し、いかに対処するか、そのありあまをつぶさに観察することで、ある時空間の個性をつかみだすことができるだろう。戸部論文は一九二〇年代の上海に着目する。「霍乱」という、既存の中医の認識カテゴリー——法貴論文のいう「エピステモロジー」——の中で、コレラの流行は受け止められ、その枠内で治療法が示されたが、効果のなさゆえに論争がまきおこる。ここには西医との対立だけでなく、中医同士の対立もあらわれた。複雑な現実を再構成した豊かな内容である。

植民地なき帝国、戦間期ドイツの「帝国医療」を考究する磯部論文は、まず前世紀転換期からの脈絡を確認しながら、先進的なドイツの細菌学が、不健康な熱帯植民地に手を差しのべて統治をする白人という独善的な構図を正当化してゆくさまを描く。さらに、「不徹底さを容認しよう」としない細菌学の考え方、方法論——これも「エピステモロジー」である——が熱帯医療を不可避的に失敗させるがゆえに、植民地喪失後のドイツ細菌学の担い手たちが、かつての植民地経験

をふまえて自己刷新を図り、キャリアを積む姿を活写する。そのうちの一人が「人種」に注目し、「地（理）医学」を提唱し、ナチ体制に共鳴する過程は、医と知と力の不可分性を思い起こさせる。

最後に、疾病地理学の手法を駆使して、大阪市における現在の救急搬送の特性を論じた木村論文は、高林論文と同じく、病因を直接的な要素——生活習慣、遺伝など——のみに求める態度を戒め環境要因も重視する立場から、疾病発生後の消化管出血患者への対応の質を検討している。統計と地理情報システムにもとづく分析結果が、健康と不健康の不均衡な地理的分布を明るみに出し、具体的な政策提言に至る点が面白い。磯部論文に出てくる「地（理）医学」との異同に思いをはせることにも意義があるのではないか。

このように、ディシプリンを越え、古代から現代にまたがり、洋の東西を貫いて描かれる「病」をめぐる複数の歴史は、バラエティにあふれているが、同時に相互に関連もして、ある論文の論点が、別の論文の別の論点と響き合うこともしばしばである。個々の論文の魅力もさることながら、全体を通してはじめて到達できる認識がある。「病」がいかに多様な問題系をなしてきたか、わたし（たち）の「病」理解がいかに一面的で限定的であるか、わたし（たち）にとって、多面的な「病」史理解が、いかに歴史理解そのものを豊かにするか。ぜひ読者の皆様には堪能していただきたい。

① David S. Jones, Jeremy A. Greene, Jacalyn Duffin, and John Harley Warner, *Making the Case for History in Medical Education*,

Journal of the History of Medicine and Allied Sciences, 70:4 (2015), pp. 623-652.